論 文 内 容 の 要 旨

学籍番号	15D003
氏　　名	黒 木　邦 弘
論 文 名	認知症高齢者に関するソーシャルワーク実践事例研究 ～言説変容の観点から～ Case Study of Social Work Practice for Older People with Dementia －from a Perspective of Discourse Transformation－

本研究は，認知症高齢者に付与された「負の言い表し」とその総体としての言説の存在を前提にし，その意味づけ方を変えることによって，人々の見方を変えることが可能であることを論証する．特に，ソーシャルワーカーの実践事例から負の言い表しの総体としての言説の論理構造を解明し，これを変容するソーシャルワーク実践「言説変容の実践」の論理と構造を明示する．

研究方法は質的研究であり，事例研究である．異なる５つの事例分析から論理を多面的・多角的に分析する設計である．研究対象は２つに大別している．研究の中心部分をなす第一は，認知症高齢者の生活を支えるソーシャルワーカーの約 30 年にわたる実践事例を 3 種の素材とした．すなわち，(1)半構造化インタビューから抽出した実践事例とその語りの分析，(2)110 回に及ぶ新聞連載記事の内容分析，(3)参加型アクションリサーチとして加わった地域住民と専門職との協働実践後のフォーカス・グループインタビュー（FGI）とその分析，である．第一の補強として位置づけた第二は，他のソーシャルワーカーによる実践事例２つをとりあげている．（4）既出のソーシャルワーカーと同系列事業所のソーシャルワーカーの実践を内容とする放送番組を素材にしたメディアの内容分析，(5)ドイツの福祉団体ソーシャルワーカーへのインタビューによる実践事例と関連事業の分析である．

本研究では「負の言い表し」の基本的な定義を，人々のウェルビーイングと発展の障壁になる不平等・差別・搾取・抑圧の永続につながると判断できる言葉，表現をさす，言説の最小単位であるとした．これに依拠する事例分析から，より日常生活レベルにおける「負の言い表し」が「社会の人々による認知症高齢者本人への蔑視，忌避，拒否，排除，一方で同情，憐憫の情を含む複雑な諸感情と態度である」ことを見出し，その総体を「老いの言説」とした．特に認知症高齢者は，異なる世代からの忌避や拒否，排除といった年齢差別を被りやすいということがわかった．認知症高齢者は，それだけでなく認知症のない高齢者による「薬で何とか抑える」や「隔離する」の負の言い表しのように，同世代による差別を被る構図を認めた．つまり，異なる世代と同世代の双方からの差別を二重に負う負の言説の論理構造が存在する。

第二は，ソーシャルワーカーによる言説変容の実践の論理構造を認めた．その論理構造の主要なものとして四つを見出した．（1）認知症高齢者個人の行動･心理症状を主要な語り

にせず、日常生活レベルでできないことを積み重ねていく（=重度化）個人をあくまで尊重することにこだわっている．ぼけや病い，死，日常生活行為ができなくなることが増えていくような老いの辛苦を，自然なことと受容する価値観を実践にいかそうとしたこと．(2) 一人の認知症高齢者に付与される老いの言説が社会的に乗り切るべき問題の最小単位であること．(3) 認知症高齢者自身が辛苦の体験を分かちあえる時間と集いの場（空間）を確保していること．(4) 時間と場所を共有できる集団の組織化をはかり，関係者が役割分担をして協働することによって認知症高齢者の問題を社会的に乗り切ろうとしていること．

そして研究の補強として位置づけたその他の実践から，認知症高齢者の問題を専門職だけで社会的に解決することはできないという限界があるため，地域社会を組織化し，多様な人々の参加を引き出し，共に考え，共に育つ，そのような場と設定が専門職の役割として重要であることを確認した．

以上から，負の言説の論理構造の解明，その言説変容という困難な課題にとりくむ実践の論理構造の解明によって，ミクロレベル，メゾレベル，マクロレベルの３つの実践を循環するようなソーシャルワークの実践を展開して言説の問題に取り組むことの重要性をあらためて見出すことができた．このことは個人と社会の複雑かつ深刻な問題を内包する関係を解決するために，多次元的に統合した実践モデルをひらく可能性を示唆する重要なことと認識する．なお，多様なソーシャルワーク実践事例を多面的・多角的に分析・検討することで事例研究の意義をみいだすことができたとともに，ソーシャルワーク実践の可視化を試みることできたと考える．